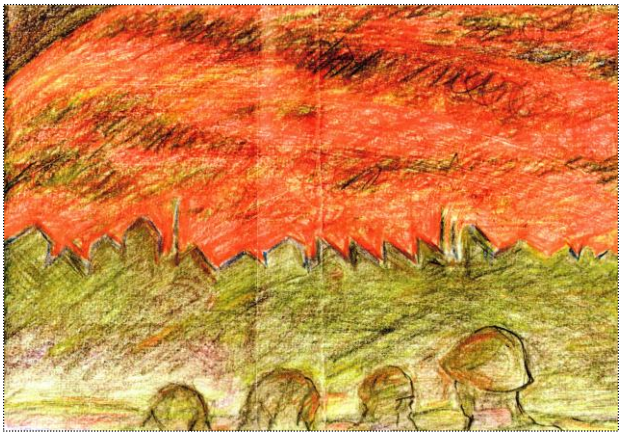
月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１３８号　2020（令和２）年10月13日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/



遠い日の記憶　東京燃ゆ（1945年３月10日「東京大空襲」）
土浦一高定時制美術科課題「思い出の風景」（絵と作文）2002/11/2 提出
（カラー版は進修同窓会ＨＰに掲載しています）

真鍋台の庭に立つ

定53回櫻井忠男氏は、定年退職が近づいた頃、定時制に成人特例選抜制度が出来たことを知り、2001（平成13）年４月に60歳で入学。「大検（大学入学資格検定試験）」科目20単位を取得して、３修３卒されました。この度、東京大空襲から定時制卒業までの来し方を綴られた玉稿をご恵贈頂きましたので、ご紹介いたします（松井泰寿（高21回）が、その一部については、ご了解を得て、加筆・編集させていただきました。）。

【　　】内は松井による注記です。

東京大空襲

私は、父櫻井亀吉、母千代乃の長男として、1940（昭和15）年11月30日に東京の足立区千住寿町で生まれました。その年の11月10日には、宮城前広場において昭和天皇・香淳皇后のご臨席の下、内閣主催の「紀元二千六百年式典」が盛大に挙行され、東京中が祝賀ムードに沸き立っていたそうです。

父は、下駄工場の工場長でしたが、私が生まれた後に引っ越した千住大川町内の防空班長もしていたようです。1944年11月末以降、空襲が激しくなり、空襲警報が出る度に、父は町内を走り回り、町民を防空壕へと誘導していました。この警報が、深夜や早朝に発令された時には、昼間の疲れでぐっすり寝込んでいる両親を揺り起こしたのは、一緒に寝ていた、当時まだ４歳の私でした。目を覚ました父は、足にゲートル（巻脚絆）を巻き、まるで兵隊さんのような格好で、メガホンを持ち、「警戒警報発令！警戒警報発令！」と叫びながら家を出て行きました。

私には10歳上の姉きよがおりましたが、当時は国民学校高等科に通っていました。学校で配給を受けたという食パンを残して持ち帰り、私に食べさせてくれました。今でも食パンの香りを嗅ぐ度に、姉を想い出します。それは、麩（ふすま　小麦を粉に碾（ひ）いた後に残る皮。飼料に用いる。）入りのパンでしたが、味も香りも食感も、五感にはっきりと残っています。配給制度における物資は遅配がちとなり、ご飯の代わりにイモなどの代用食が増えて、空腹を抱えていたためでしょうが、何より姉の思い遣りが嬉しかったのだと思います。

1945年３月10日、首都東京は、米軍機Ｂ29の猛爆を受けました。日付が変わった直後の午前０時７分に爆撃が開始され、江東区・墨田区・台東区に跨がる東京の下町は、炎の海と化し、阿鼻叫喚の大惨事となりました。私は、母に連れられていつもの防空壕に潜んでいましたが、昼近くになって漸く防空壕から出てみると、空全体が夕焼けのように真っ赤でした。その異様な光景は、今でも目に焼き付いています。私は何事が起きたのかも分からず、ただオレンジ色の空を眺めていました。母がその時、「浅草が燃えている。」と言ったことや壕の入口には子ども用の踏み台としたミカン箱があったことなど、そんな途切れ途切れの事が記憶に残っています。あのＢ29の低重音の爆音は、今でもたぶん聴き分けられると思います。東京大空襲の記憶は、私の、最も小さい時の記憶です。が、決して忘れてはいけないものだと思っています。

疎開

３月10日以降、毎日のように警報が発令されて、我が家の周辺にも焼夷弾が落ちるようになり、父は東京を離れる決心をしたようです。焼け出される寸前の疎開、逃避行でした。

父の実家は、江戸崎町（現稲敷市）田宿の農家で、母の実家も、木原村（現美浦村）興津の農家でした。先ずは、父の実家に向かったようです。

我が家の移動手段は、１台の荷車でした。家財道具を全て積み込んだ荷物の最上段に盤（たらい）が置かれ、私はそこに載せられての移動でした。この時、姉は既に阿見町の航空廠（一空廠）に勤労動員となっており、１家３人で、取手の街中に１泊して、２日掛かりで霞ヶ浦湖畔の郷里に辿り着きました。道中は眠りこけていたのか、詳しい記憶はありません。

父や母の実家に暫く仮泊し、居候した後、隣村に借家することになりました。そこは、鹿島海軍航空隊の所在地・安中村（現美浦村）でした。安中村の第一印象は、「戦時中だとは思えない、とても静かな村」でした。村のほぼ中心にある集落・土浦に住むことになりました。借家は、道路沿いの長屋で、以前は兵隊さんを客とする射的屋の家屋だったそうです。

私は安中村に来て、湖上を飛ぶ水上機を初めて見ました。日の丸の付いた飛行機で、フロートもはっきり見えました。安中村は北・東・南が霞ヶ浦に面していて、東端の大山（現美浦村大山）に鹿島海軍航空隊がありました。村の東西を走るメイン道路は、航空隊が終点となっていました。【鹿島海軍航空隊の施設は、1937（昭和12）年頃に建設工事が始まり、翌年５月11日に霞ヶ浦海軍航空隊水上班が移転して、霞ヶ浦海軍航空隊安中水上隊となり、12月15日に水上機操縦教育を担当する鹿島海軍航空隊として独立した。水上班が大山地区に移転した理由は、地区の東端が霞ヶ浦に突き出ていて、２つの方向に滑走台（カタパルト：圧搾空気や火薬などの力で、艦船の甲板などから飛行機を発進させる装置）を設置すれば、２方向への離陸が可能であることや、対岸までの距離が最も長く、水上初歩練習機・水上中間練習機の操縦訓練に適していると判断されたことによる。水上機は横風を受けると横転し易く、常に風の向きを観測することが必要だった。２方向に滑走台があれば、風向きが変わっても離陸が可能である。アジア太平洋戦争開戦後は、水上偵察機や潜水艦の攻撃隊も加わり、本土の防衛、搭乗員の教育、鹿島灘における対潜作戦を主な任務とし、1000人を超える大規模な基地となっていた。（伊藤純郎　「第40回土浦博物館特別展記念講演会　ふたつの航空隊と空都土浦」（2018年10月１日）】

住み着いて程なく、外出を許された兵隊さんが、近所の農家をよく訪れ、昼間から風呂に入ったりして、寛ぐ姿を見掛けるようになりました。その農家の風呂は、ドラム缶を利用して作られた五右衛門風呂で、私も入れてもらいました。その風呂に入っては、兵隊さんに教えてもらった軍歌を唄っていました。私が、『同期の桜』を覚えたのはこの時です。「貴様と俺とは同期の桜、同じ鹿島空の庭に咲く……」、このように覚えました。元の詞が「兵学校の庭」であると知ったの

は、成人してからのことでした。

終戦

8月15日、隣家の庭先に数人の大人たちが立って、家から流れるラジオを聴いていました。私もその中に立ち入りましたが、何のことか聴き取れません。それが、あの終戦を告げる玉音放送だったのです。大人たちの話から戦争が終わったことが分かりました。

間もなく、一空廠に動員されていた姉が帰って来ました。8月18日に女子挺身隊員と女子動員学徒の退廠式が行われ、落下傘用の布だという白い生地の特配を受け、戻って来たのです。当時の落下傘は絹製でしたので、生地は、母や姉がシャツやブラウスに仕立てました。その姉も2018（平成30）年に逝ってしまって、当時のことを聞くことが適いません。戦中・戦後のことは、お互いに良い思い出が少なかったせいか、あまり話をしていませんでしたので、残念です。

終戦で航空隊は解隊となり、兵隊さんたちは復員して行きましたが、中には、村の娘さんと結婚して、村民となった方もかなり居たようです。村内には士官住宅と呼ばれる住宅群もあり、元の軍医長さんや士官だった方々も、何人か村民として残り、そこに住み続けていました。

航空隊の施設には、1947（昭和22）年5月29日に、結核療養のための東京医科歯科大学附属霞ヶ浦分院が開設されました。この分院は、1997（平成9）年3月31日までおよそ50年の長きに亙って、内科を中心に霞ヶ浦地域の医療を支えてきました。本部の建物は、迷彩色に塗られた当時のまま残されていましたし、50mプールも残っていました。

父と母とは、末っ子同士の結婚であったため、分家も難しかったようで、父は下駄作りや自転車の修理、農家の手伝いなどの賃仕事で収入を得ていました。母も、近所の繕い物などの裁縫仕事で家計を支えていました。1946年12月には妹の孝子も生まれ、生活は苦しかったようですが、子どもの私には分かりませんでした。

母の死

1955（昭和30）年8月、中学3年の夏に、私は、土浦一高を訪れて校庭に立っています。当時、安中小に勤務されていた白井昭雄先生（中45回）に連れられて、砂利道を自転車に乗り、1日掛かりでやって来たのです。先生は、安中小では隣の組の担任でしたが、何かと目を掛けてくれ、その後も顔を合わす度に、学業の様子を聴いてくれました。旧本館を前にして、先生は、「明春はこの庭に立て。」と励ましてくれました。帰りには、市内の2軒の書店に立ち寄りました。真鍋の坂を登り、あの旧本館の玄関前に佇んだことは、忘れられない思い出となりました。

しかし、9月9日、47歳で母が身罷りました。茫然自失、泣くことも出来ません。その母のことを、2002（平成14）年5月18日に提出した、土浦一高定時制美術科課題「想い出の風景」（絵と作文）に、次のように綴りました。

「野原と母と――幼き日の思い出」

2年　櫻井忠男

母千代乃

父亀吉

「野原と母と――幼き日の思い出」

思い出の風景といえば母とのスキンシップ、野草摘みである。私は14才で母を亡くした。

ものごごろのついた5歳頃からわずか10年ほどのふれあいしかない。昭和20年3月、戦火の東京を逃れて一家は父母の郷里に帰ってきた。霞ヶ浦湖畔の村は戦時中とは思えぬのどかで光に満ち溢れていた。しかし現実には田舎でも食糧難であり、私たちは代用食でしのいでいた。母と子は湖畔の土手で野びるやよもぎを摘み、おじやの具にする。それはのちに知ったこと、当時は母と戯れる楽しいひとときだった。還暦を過ぎた今でも春の陽光がふりそそぐ野原の風景に出会うと、そこに母の幻影を求めている自分に気づく。草いきれと母の匂い、その甘酸ぱい記憶を大切にしている。「遠い日の記憶」である。

就職

姉のきよは既に嫁いでおり、母の死で父子3人の生活となりました。進学は諦めざるを得ず、中学卒業と同時に働き始めました。就職先は、奇しくも、白井先生と訪れた土浦の白石書店でした。15歳からの10年間は、住み込み生活をしました。当時の休日は月1回で、朝は7時起床、朝食が済み次第、仕事に着き、終業は夕食後の9時です。我ながらよく働いたものです。兵学校の「月月火水木金金」が当て嵌まる気がしていました。60歳まで白石書店で働き、文字通りの「一所懸命」でした。

海軍の兵隊さんたちが身に付けられていた「5分前精神」は、私たちビジネスに携わる者にもとても役立つことで、仕事の上でも日常生活でも、常に心掛けてきました。約束の時刻を守ることで、ビジネスもかなり成功しました。何事にも、早め早めに、と準備に取り掛かるため、「せっかち！」と、今でも笑われていますが、良いことだと思っています。

10年間、働き詰め、25歳で真鍋6丁目に自宅を建てました。妹も、中学を卒業すると白石書店で働いていました。それで、父親を呼び寄せ、妹と3人で暮らせるようになりました。父は77歳で亡くなりましたが、親孝行の真似事ぐらいは出来たかな、と思っています。

土浦一高定時制入学

15歳から60歳まで、一途に職を全うしましたが、定年が近づくにつれて、あの真鍋台の校舎で学びたい、との思いが強くなってきました。白井先生の励ましの言葉が甦りました。しかし、「60の手習い」での受験勉強はとても出来そうにありません。諦め掛けていたところ、定時制成人特例選抜制度のことを知りました。特例選抜では、学力検査を行わず、調査書・作文・面接の結果及びその他選抜に関する資料を参考とし、能力・適性等を総合的に判定して合否を決めます。これなら何とかなる、と思いました。調査書は発行されず、卒業証明書で代替されました。私は、45年間待ってのチャンス到来、と入試に臨みました。作文では、ヤマが外れて戸惑いましたが、何とか時間内に書き上げました。2001（平成13）年3月の合格発表日、念願の合格を果たした私は、この日のために墨書してきた「サクラ（イ）、サク」の原稿を、近くの店からファクシミリで妻の元に送りました。入学式では、白井先生の「明春はこの庭に立て。」との激励の言葉に応えられた、と感無量でした。

白井昭雄先生

安中中卒業後、最初の同窓会（最後列右から3人目が櫻井氏。安中中にて1956（昭和31）年8月）

本校での3年間は、先生方の「分かるまで教えます。いつでも質問に来てください。」との言葉に励まされ、何事にもチャレンジしました。簿記実務検定2級取得・「高校生絵画公募展」定通生部門最高賞受賞・全国定通陸上大会（砲丸投げ）出場、など、高校生活を丸ごと味わい、楽しみました。（高21回　松井泰寿）